

「 秀吉の中国攻め 」(写真つき)

「備中高松城に行ってみよう」

長年、温めていた旅先だった。

「高松城の水攻め」はあまりにも有名だ。

羽柴秀吉が、本能寺の変で織田信長の死を知ったのは、この高松城の水攻め最中だった。そこで、「中国大返し」をし、姫路城を経て、明智光秀との「山崎の合戦」で勝利し、天下人への道をひた走りした。羽柴秀吉が関白・豊臣秀吉になる文字通りターニングポイントになった場所だ。

今年の夏休み一人旅は備中高松城にしようと思った。

2009年8月26日～29日の3泊4日とした。

ほかにどこへ行こうか。

城好きの自分にとって、近くにあって、自分が行っていない名城は山陽の小京都・備中高梁市の備中松山城、よし決めた。さらに、高校の修学旅行で行った岡山城は近い。同じく姫路城、中学からの親友・米原君が最近訪れて感心していたところだ。

姫路に行くなら、赤穂浪士の播州赤穂城にも寄ってみよう。

ここまで決めた時、なにか頭の中でうごめいたものがあった。

姫路城、岡山城、備中高松城とくればどうしたって羽柴秀吉を思う。

「なにか忘れてるぞ」、そうささやきが聞こえた。

「三木の干殺し(ひごろし)」だ。

三木城の別所長治が羽柴秀吉により兵糧攻めをされた。

兵士はネズミや木の皮まで食ったという「三木の干殺し」だ。

秀吉は三木城から姫路城、岡山城、そして備中高松城へと進出していった。

「三木城に行こう」

今回の目玉は、備中高松城此と三木城此だ。

そしたら、テーマは決まった。

「秀吉の中国攻め」だ。

経路を決める。

三木城ってどこにあるのだろう。

「兵庫県の歴史散歩」という本を借りてきた。

神戸の北西にある。

パソコンで列車経路を調べる。

新幹線で「新神戸」、地下鉄に乗り換え「湊川公園」に、徒歩で「湊川」、神戸電鉄で「三木・上の丸」と出た。ようやく三木城址に行ける。

8月26日 9:29発 のぞみ15号で新横浜を出発した。

途中、湊川公園で楠正成の銅像前で記念写真を撮り、「三木・上の丸」には13:30ころに到着した。

散々探し、駅前に唯一あった食べ物屋のすし屋で腹ごしらえをする。

よっこらしょと、リュックサックを背負って、いざ、三木城址へ。

ガードをくぐるとすぐに階段があった。

5分くらい上るとすぐに本丸跡に着いた。ずいぶん近い。

えっ、これで秀吉が攻めあぐねたのか。

1年10ヶ月も兵糧攻めしなくてはならない難攻不落の城かと思った。

それでも、本丸跡の側面は崖でその向こうには美囊川（みきがわ）が流れている。

今とは地形も違っているのだろうから、やはり攻めるに難しかったのかな。



本丸跡の案内板には秀吉が城を包囲した陣地などが図示されていた。

羽柴秀長、竹中半兵衛、荒木村重などの名がみえる。

はるか向こうのこんもりしたところが秀吉の本陣だったのだな、ふむ、ふむとうなずいた。

本丸跡の案内板で記念写真だ。

そばには高校生らしいカップルしかいない。

無粋とは思ったが、“シャッター押してくれる”と頼んだ。

男の子が押してくれた。

すぐ隣に三木城主・別所長治・辞世の句の碑があった。
天守台の跡だろうか少し小高くなっている。
碑の句を読もうとしたが、そこには、またまた、別の高校生カップルがいた。
わざと行ったり来たりしていたら、場所を空けてくれた。
この天守台から眺めると、美囊川はだいぶ下を流れている。
あの川の向こうから攻めるとなると、ここまでは結構遠いな、高いな。
“ やっぱり兵糧攻めしかなかったのかな “
1年10ヶ月の籠城(ろうじょう)の末、別所長治は城兵の命と引き換えに切腹した。



「今はただ うらみもあらし 諸人の いのちにかはる 我身とおもへば」

ここに隣接していた「金物資料館」に寄る。
「村の鍛冶屋」童謡歌詞の碑が立っていた。
秀吉は三木城下町の復興を図り大工などを呼び寄せた。
その大工道具を作るなどでこの町の金物製作が発展した。
「三木の金物」で有名だそう。
資料館では管理人の方が出てきた。
私は、実は金物でなく三木城に関心があるということ、それならと、三木城復元図やら、羽柴秀吉対別所長治、三木の干殺しなどの冊子をくれた。
“ やっぱり、言ってみるもんだ ”

城を下り、秀吉駐在のお寺により、町をぶらりぶらり歩くと、三木市観光会館があった。
会館の方とだべり、「探訪・三木合戦」「三木合戦・謎を追う」という小冊子を買った。
秀吉は三木城に入り、しばらく善政を敷いたあと、“御着”城主・小寺官兵衛(後の黒田官兵衛)の進言で、より便利で立地の良い姫山に城を築き移っていった。これが姫路城である。
しかし、三木の町では秀吉の人気もあるが、やはり、別所長治である。
城兵の命の身代わりとなって切腹していった若干23歳の若き城主の人気は高い。
この町の滞在時間は1時間くらいかと予定していたが、2時間はゆうに越えていた。

神戸電鉄で「粟生」、JR加古川線に乗り換え「加古川」に、山陽本線で「姫路」に着い

たのは5時38分だった。姫路の一つ手前の駅が、あの官兵衛の「御着」だった。(発見)

姫路で宿に入り小休止。

食事をしに街に出るが、その前に姫路城の夜景を見に行こう。

宿からは徒歩20数分であろうか、大通りを一直線。

向こうにライトアップされた姫路城が浮き出ている。

大手門をくぐり天守閣を見上げる。

堂々としたもんだ。きれいなもんだ。

明日又来るからとリターン。

来しなに気になったおでん屋さん「十七八」にはいる。

カウンターになっていて12~3人くらい入れるだろうか。

先客は家族連れと中年女性、サラリーマン風の二人連れだった。

私は中年女性の隣に座らされた。

この店は“となはち”と呼ぶそうで、姫路ではおでんを名物にしようと力を入れている。

観光客にも人気があり、空き席があるのはラッキーな人気の店だという。

女将が聞いてきた。

「なんにしまひょ」

「大根と生揚げ、それにスジ」

「はいわかりました」

「ちがうちがう、そのスジじゃない。あっそうか、ここは関西だ」

「お客さん、関東の方ですか」

「横浜ですよ、なんでわかった」

「この間も、スジちがいのお客さんが関東の人でしたよ」

「そうだね、こちらでスジって言ったら牛筋のことだもんね、僕は肉は嫌いなんだ」

騒ぎも収まり出身地から土地の話題に移っていった。

当然、姫路城の話になるから、それは適当にほめてから、三木城址の話に変えていった。

ところが、この話についてこれた人がいた。

行ったことがあるという、隣の中年女性である。

別所長治の妻子の辞世もあったと私の同意を促す。

関が原や姉川合戦の地にも行ったと私の記憶も引き出してくれた。

それどころか、備中高松城の話を出してきた。

さらに、御着城の黒田官兵衛で、もう話の合うこと合うこと、嬉しくなっちゃった。

するとこの時、二人ずれの客が入ってきて、うるさいこと、うるさいこと。

中年女性は勘定をして帰っていった。もう～。
女将にそっと聞くと、女将の旦那の友達の奥さんだそうであった。

翌朝は姫路城、又歩いていった。
行きがけに、昨晚気になっていた姫路城のまん前にある建物に寄ってみた。
昨晚はガラス壁がライトアップされてきれいだった。
そのガラス壁の曲線が姫路城の石垣曲線を模しているということで、「イーグルス姫路」というショッピングセンターだった。
屋上庭園があるという。
眺めがいいだろう、よし、上ってみよう。
大正解だった。
おそらく、姫路城全体を眺められるのはここだけではないだろうか。
うん、姫路城はなかなかの大城郭だわい。いいねえ。

姫路城は国宝であり、日本最初の世界遺産。いくたびかの戦災にも免れた奇跡の城。
お城の中のお城といわれている名城だそうな。
入場券を買うとき目に付いた。
「ガイド承ります」
よし頼もう、2000円だった。
ガイドは客が私一人だけなのに驚いたようだった。
「イーグルス姫路の屋上庭園から姫路城を眺めてきた」というと、「あそこはガイドの最後に、お客さんに、ぜひ帰りに寄ってください、いいですよと言う所ですよ」と又驚いた。
私が行ったことのある城、城址を数えると130位あるという、さらに驚いた。
2時間たっぷり、マンツーマンで案内してもらった。



2週間後くらいだろうか、NHK「歴史秘話ヒストリア」で姫路城を紹介していたが、おかげで、よくわかった。

私の結論は
姫路城はなるほど名城だ。お城の初心者や外人さんに薦めるとすると、まず、ここだ。でも、通の人には、古城の雰囲気はなんといっても、私の大好きな“彦根城”ですね。

午後、「姫路」から山陽本線、赤穂線直通で「播州赤穂」へ32分で到着。3時だった。駅前バスガイドにつかまる。

乗り降り自由、大人一人100円、「くらちゃん号」に乗れという。

くらちゃん号？ そうか、大石内蔵助のくらちゃんか。

播州赤穂城は歩いていけそうなところだったが、女性に弱い私はすぐに乗った。

二つ目のバス停にはボランティアの男性ガイドが待っていた。

降りたのは私一人、又もマンツーマンのガイドでした。

途中の大石内蔵助邸を見て、大石神社に寄り、なんだ、殿様より家老が主役だな。

城跡の説明を受け、ガイドと別れ、隣の市立歴史博物館で製塩法の展示を見た。

忠臣蔵ゆかりの花岳寺に寄ったが5時を過ぎていて、もう閉門していた。



「播州赤穂」から「岡山」に向かう。

ここで、間違えてしまった。

予定は「播州赤穂」から「相生」まで戻り、新幹線で「岡山」に行くつもりだった。

ところが、「播州赤穂」から同じ赤穂線でも相生行きでなく、直接「岡山」行きに乗ってしまった。しばらくは気がつかなかった。

まあいいか、海沿いにローカル線でのんびり行こう。40分多くなってもいいじゃないか。

それでも収穫があった。

駅名に私の知識が引き出されてくる。

「長船」、うん、あの名刀・備前長船か。ここなのか。

1時間50分ほどのローカル線の旅、結構いいもんだ。

「岡山」には7時前に着いた。

秀吉は姫路城を築き、中国地方の軍事的集結基地とし毛利攻めの拠点とした。

ここから鳥取城攻略に乗り出し「鳥取城の渴（かつ）え殺し」が行われる。

そして、播磨から備前へと西進し、岡山城の宇喜多氏を懐柔して味方にしている。

岡山城で宇喜多秀家の母・お福とよろしくやるようになったとかいわれている。

そして、「高松城の水攻め」となる。

この「三木城の干殺し」「鳥取城の渴え殺し」「備中高松城の水攻め」が秀吉の中国経略における三大籠城戦という。

翌朝、いよいよ「備中高松城」だ。岡山城は明日に後回し。

「岡山」駅で駅弁“八角祭り弁当”を買う。

三木でも、姫路でも、昼食がさえなかった。備中高松城址で弁当をつかうんだ。

「岡山」からJR吉備線にのる。この沿線には“桃太郎伝説”の史跡がちょこちょこことある。大和朝廷が対抗勢力の吉備の国征伐に何とかの皇子を派遣した。吉備津彦命（きびつひこのみこと）という。その相手が朝鮮人帰化人の鬼みtainな男で、住んでいたところが「鬼ノ城（きのじょう）」だった。これが、桃太郎話になっていったという。

私の行きつけのマッサージさんに教えてもらったので寄ってみようと計画に入れていた。

吉備線で3つ目の駅「備中一ノ宮」に一時下車して、吉備津彦神社に寄る。

備前の国の一宮として信仰を集める神社だそうで、吉備津彦命を祀っている。

流造りの美しい社殿だった。

ローカル線は列車間隔が長い。乗り遅れると大変だ。大急ぎで駅に戻り、30分後の列車に乗り、一駅目の「吉備津」で降りる。ここでは、県内最古の神社で同じく吉備津彦命を祀っている吉備津神社がある。

駅を降りると丁度タクシーを降りた人がいた。なんということもなく、そのタクシーに乗り込み「備中高松城に行くけど、その前に吉備津神社まで行って」。ところがこれはまったくの偶然で、ここでタクシーを拾えるのは奇跡ともいっていいそうだ。都会と違ってタクシーはどこにでもあるというもんじゃない。そんな計画を練った私が心得違いだったが、天は又も私に味方した。

吉備津神社の比翼入母屋造りの本殿、拝殿は国宝である。でも私には、約400mにおよぶ回廊が、たしかに神秘的で、ちょこっと降った小雨がさらに雰囲気を出していた。



「備中高松」は隣の駅である。待たせていた奇跡のタクシーで向かう。

すると、タクシーの運ちゃんが「お客さん、最上（さいじょう）稲荷は近いですよ、行きませんか」という。京都の伏見、愛知の豊川と並ぶ日本三大稲荷の一つだという。

好奇心旺盛の私が行かないはずがない。行ってみると、まあまあこんなものか。

いよいよ、備中高松城かとタクシーに乗り込むと、また運ちゃんが言う。

「お客さん、秀吉の奥さんの家族がいた陣屋がありますよ」

秀吉の女房「寧々」の兄弟である木下家次が一時治めた足守藩侍屋敷である。

私を売り上げの上がる上客とみたのだろうか。ずいぶん惹かれたが、時間が足りない、

「備中高松城へ」。

タクシーを降りると、予想していた情景とずいぶん違う。

人家がすぐそばにあり、なにか原っぱみたいだった。

それでも、「高松城跡」の案内板で記念写真を運ちゃんに撮ってもらった。



少し離れたところにパノラマ版のような案内図があり、水攻めでの毛利軍、羽柴軍の両軍陣構えが載っていた。

なるほど、水没した備中高松城をはさんで両軍はこう対峙していたのか。

あそこが毛利軍で、向こうが羽柴軍か。う～ん・・・

すると、どこかで私を呼ぶ大きな声が聞こえた。

「大将、ここへ来たら向こうの本丸跡にいかなくっちゃ」

見ると、さっき記念写真を撮っていたとき、私をじろじろ見ながら通り過ぎていったおっちゃんだった。

“うるさいな、そんなのわかっているよ。その前に両軍の陣構えや地形を頭に入れて、それに、すぐ傍にある記念館で情報を入れてから行こうと思ってるのに、勝手にさせてよ”とは思ったが、彼も親切で言ってくれているので、まあいいか、旅は道連れだからな。相変わらず、人のいい私に戻って一緒に本丸跡に向かった。

100mくらい先だろうか、再生された沼に蓮の葉が茂っている。もう盛りを過ぎたのだろう、1,2輪の花が咲き残っていた。小さな木の橋があり、その先が本丸跡だった。

城というと小高いところにあるという印象だが、ここはほぼ平らで、こんもりとした木々に囲まれていた。



中ほどに清水宗治の辞世の句碑があり、その先に石造りのテーブルとベンチがあった。あそこは昼飯に良いなと考えていたら、「それじゃあ、わしはこれで」とあっさり彼が言う。

「ところで、最上稲荷は近いかな？」

「車で5分から10分で行きますよ」

「それから松山城に行くんだ」

「私もこの後に行きますよ」

「それじゃあ、向こうでまた会えるかな」

「さあ、どうでしょうか、まあ～」

「じゃあ」

まあ忙しいもんだ。こちらはこれからじっくりと備中高松城を味あおうと思っているのに。

ようやく彼と別れられたので、私はきびすを返して記念館まで戻った。

正式には「高松城址公園資料館」という。小さな二階建ての蔵のような建物だったが、スリッパに履き替えて中に入った。

中には解説の写真や吉備の国時代の出土品などが展示されていた。

特にどうということもなく、ぶらぶら見学して二階に上がっていった。

階段を上がって、周りを見回し、何気なく目を上げた。

壁の上部に張られていた写真を見て、思わず目を見張った。

そこに、水攻めをされている高松城があるではないか。

「何でこんな写真があるんだ！」

本当にびっくりした。でも、あの時代に写真はない。

よく見ると、昭和60年6月に地元の歴史家が撮影した写真だった。

台風による洪水で、地元一帯が水没した。

まさに浮城を連想する高松城地域の洪水写真だった。

高松城本丸地域の標高は4m88cm、水位は標高5mだったそうで、本丸の森と二の丸、三の丸部分など微高地がちょこっと水面に出ている。周り是一片の水である。

これはちょうど羽柴軍方面から見ていることになる。私はおもわずあの時代にタイムスリップしたかのような錯覚を覚えた。そして悦に入った。



私の特技として、史跡に行き目をつぶると、その時代に自分がいるかのような気持ちになれる。しかし今度は、これほどびっくりしたことはない。これほど得をしたことはない。なにしろ、目をしっかりと見開いて、その時代に行ったのだから。

この写真が載っている「備中高松城、水攻めの史跡を歩く」という小冊子を買って、もう一度、本丸跡に行った。そしてあの石のベンチで昼食の「八角祭り弁当」を食べた。すっかり清水宗治になった気分で舌鼓を打った。

落ち着いてみると、秀吉の水攻めを考えてみた。こんな平らな平城で、しかも、本丸、二の丸、三の丸もきわめて規模が小さい小城だ。どうして秀吉は力攻めでなく、水攻めというまどろっこしい手を使ったのだろうか。一つは高松城を囲む回りの地形だったのだろう。沼と田んぼ、田んぼに水を引き込めば一面がどろ沼。道が細ければ大軍は一度に押し寄せられない。大きな犠牲を強いられる。二つ目は、きっと秀吉の性格なのだろう。味方が多勢のときは、位攻めで兵の犠牲を最小にして敵を下す。

だから、三木の干殺し、鳥取の湯え殺し、高松の水攻めだった。この兵の犠牲を嫌うという彼の戦法が毛利との対陣で、結局は無傷で退陣し、明智光秀との山崎の決戦で戦力をフルに活用することができた。対決していけばそうはいかなかった。

さらに、彼の強運をおもう。水を引き、高松城を水面に孤立させた次の日に、ようやく毛利の援軍が到着した。もう一日早かったらどうなったかはわからない。そしてもし、本能寺の変の情報が毛利に早くに入っていたら、和平はなかった。まったく、秀吉は運が強い。そして、その運を彼自身の実行力でものにした。

秀吉は、本能寺の変を知ると、毛利軍が知らぬうちにと和平を結び、中国大返しとなる。清水宗治は、将兵の命と引き換えに、水面に浮かべた船の上で腹を切った。

宗治公辞世の歌碑の近くに女性が二人いた。母娘だろうか、年配の娘さんらしき方にシャッターを押してもらった。



辞世には

「浮世をば、今こそ渡れ武士（もののふ）の、名を高松の苔に残して」 とあった。

「備中高松」の駅までは、田園風景のなか20分くらいだろうか、のんびりと歩いた。再び吉備線で「総社」まで行く。そこで、伯備線に乗り換え「備中高梁」に到着。もう15時を過ぎていた。予定より1時間以上遅れていたが、あの“水攻め高松城”を見たのだから気持ちはうきうきだった。

駅前からタクシーに乗り、備中松山城への上り口に着く。備中松山城は山陽の小京都・備中高梁市の北端にある臥牛山の4つの峰の内の一つ、小松山の山頂（標高約430m）を中心に築かれた近世城郭で、天守の現存する山城としては随一の高さを誇るという。

ここからは急な山道を登る。3～40分ほどで本丸の天守閣に近づいた。
「やあ、来たね」という声の上から降ってきた。
あの高松城で会ったおっちゃんだった。
「車で来たの」
「いや、電車を乗り換えて来ましたよ」
「松山城はたいしたもんだ、きつい思いをして上ってきた価値は十分あるよ」
「そうですか、でも、高松城も素晴らしかったですよ」
「えっ、高松城が」(どうしてといわんばかりに)
「(価値のわからない方にはわからないでしょ)」(さすがに、これは言わなかった)
「それじゃあ、私も見てきますよ」
「じゃあ」

天守閣の入り口には、管理人の男性が二人いた。入場料を払うと「飲んでいきなさいよ」と冷たい麦茶をついでくれた。急坂で、汗を出してきたのでとてもうまかった。しばらくのあいだ、天守閣談義に花がさいた。パンフレットをもらい天守閣を登る。

天守閣のなかに、籠城戦になったとき城主が生活する小部屋や調理場があった。天守閣に生活の匂いなどほとんどないのが常識である。こじんまりとした天守ではあるが、何か風情がある。中世から戦国時代にかけて、取ったり取られたりした城である。実戦経験がこの城に臨場感を与えているのだろうか。備中松山城は、うん、気に入った。



下山するときケータイで呼んでいたタクシーはあまり待つことなく来た。

駅までの帰りに、武家屋敷と頼久寺に寄ってもらった。見学時間は5時までということなので大急ぎの駆け足見学だった。それでも、頼久寺では小堀遠州の庭園をちょこっと楽しんだ。何とか小路も急ぎ足。

「備中高梁」から「岡山」は以外に早い。L特急で「倉敷」経由で30分ほどで着いた。

岡山での宿舎は駅前のシティホテル。食事は町で軽く済ます。昨夜と同じ小料理屋に顔を出す。おばんざいを2,3種頼む。

「おばちゃん、昨日はなかったけど今日はほうれん草があるね」

にこっと笑った顔が、どうやら、やっと、昨日来た客だと気がついてくれたようだ。

翌朝、タクシーで岡山城に行く。

大手門の脇に立て看板がある。10時からお城のガイドがあるという。おまけに無料だ。

10分、時間をつぶし集合場所に行くと、私のほかには誰もいない。またまたマンツーマンだと思ったが、違った。なんと、ガイドが二人もいる。

女性がまだ見習いで、ベテラン男性ガイドのあとをついて研修するという。

私の城訪問回数を聞いて、男性ガイドは案内するに絶好の人だと、なんだかわからないことを女性新米さんに言っていた。

岡山城の城主では宇喜多氏が人気がある。関が原のあと入城した小早川秀秋は、やはり、よそ者で裏切り者の印象がぬぐえないようだ。

石垣の変遷を特に熱心にガイドしてくれた。同じ並びの石垣でも境目にはっきりと違いが出ていて、歴代城主の増改修のあとと、なるほどよくわかる。

天守閣の前面に特徴がある。板塀が垂直に立ち大きい。記念写真をパチリ。1時間ほどのガイドが終わった。



お堀の橋を渡って後楽園に行く。金沢・兼六園、水戸・偕楽園とともに、日本三大名園の誉れが高い。高校の修学旅行で記念撮影をした場所はどこかと探した。ここらあたりかと特定したときにはフィルムが残っていなかった。仕方なく、ケータイでパチリ。

川の橋を渡ったところに竹久夢二記念館がある。夢二の大正ロマンを味わって路線バスで岡山駅に戻る。

ホテルで預けておいたリュックサックを引き取り、前日見つけておいた駅中のすし屋で昼食を取る。岡山城や宇喜多の話をするとう親父がのってきた。1時もすぎているのでお客もまばらで丁度良かったのか。岡山の老舗で町に店があるという。今度きたら寄ってくれと愛想がいい。

14時28分発の“のぞみ”で帰路に付く。

秀吉は、備中高松から岡山城には寄らずに姫路城まで一気に駆けた。信長亡き事を知ったら宇喜多が裏切るかもしれないと用心したのだろう。姫路城の財宝をすべて部下に分配し、気前のいい所を見せて、明智光秀との戦いに臨んでゆく。“中国大返し”である。

秀吉が、後ろの毛利を気にし、松明を照らしながら、おにぎりをほおばりながら、ひたすら姫路目指して駆け抜けた。その苦勞に苦勞した中国路を、私は新幹線の中で、つい、うとうとし、気がついたらもう姫路を過ぎて明石に差し掛かっていた。わずか、30分くらいのことだった。

私の“秀吉の中国攻め旅行”も、まもなく終わろうとしている。

(`09 - 12 - 7 完)